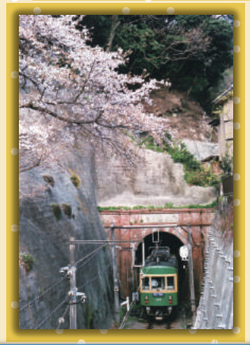
2018年5月28日発売！

江ノ電ファンの写真愛好家による写真集で沿線風景をめぐる旅へ…

写真集
江ノ電のある風景
写真でたどる江ノ電40年の歩み

著者　須藤武美　野口雅章



■価格
800円（本体）＋税

■発行所
江ノ電沿線新聞社

■仕様
A4サイズ
36ページ
フルカラー

■お取り扱い
★江ノ電グッズショップ　鎌倉／藤沢／江ノ島
★ジュンク堂書店 藤沢店　★有隣堂 藤沢店
※お近くの書店へご相談下さい（地方小出版ルートでお取り寄せ可）
★江ノ電沿線新聞 セレクトショップ（江ノ電沿線新聞HP内）
お問合せは　江ノ電沿線新聞社まで　☎0466-26-3028

湘南から送りたい絵はがきと湘南を深く調べる本
取り扱ってます。

いつでも OPEN!
江ノ電沿線新聞 セレクトショップ

江ノ電沿線新聞セレクトショップ　検索

写真集『江ノ電のある風景』　出版記念

江ノ電沿線座談会

古都鎌倉と藤沢を結ぶ、わずか10キロの路線を走る江ノ電。街中を抜け、海沿いを走り、路地裏を走って行きます。沿線の情景はバラエティに富み、咲く花たちは四季の移り変わりを感じさせてくれます。そんな江ノ電を追い続けてきた40年の中から選りすぐった写真集が出版されます。

【出席者】
須藤武美氏（写真愛好家・江ノ電乗車歴70年の江ノ電ファン、著者）
野口雅章氏（江ノ電ファンクラブ初代代表、著者）
代田良春氏（江ノ島電鉄OB、現在江ノ電沿線新聞連載中「鉄道乗り歩る記・撮り歩る記」著者）
（司会）吉田克彦

「記憶より記録への思いが写真集出版へ

須藤　江ノ電とのおつき合いは昭和23年に江ノ電沿線に引っ越して以来、70年にもなります。通っていた小学校がある鎌倉駅までの往復に利用していたのですが、当時はのんびりした雰囲気も良かったですね。車内が混雑してくると、運転手さんの横や車掌さんのスペースに入れてもらうことができたのです。大町の踏切では、踏切係の方がワイヤーを手動で上げ下げし、ワイヤーが下りると旗を振ります。通学時間は夢のようなワクワクする一時でした。そんな子供時代があったからでしょうか、大人になるにしたがって沿線の情景への興味が膨らんできました。写真歴は60年程ですが、昭和50年頃から集中して江ノ電を撮るようになり、平成になってからは、より一生懸命に撮り続けました。沿線の情景が変化するのを実感するようになったことで、記憶より記録に残し、より多くの方に見ていただきたいという思いが今回の出版に繋がったのです。

廃線計画から ブルーリボン賞 受賞まで

代田　今、江ノ電は江の島、鎌倉の観光の足であるばかりでなく多くの人々に親しまれ、日本はかりでなく、世界にも知られるようになりましたが、かつては廃線の計画があったのです。江ノ電に在職中の昭和37年頃、当時の上司から「廃線を検討せよ」との指示を受け、調査を担当しました。当時の一般家庭はマイカーを保有している人は少なく、バス利用者がほとんどだったので、バス業界の業績は右肩上がり。正にバス全盛の時代でした。その中で廃線の検討は当然といえば当然の話です。

代田良春（しろたよしはる）
江ノ電沿線新聞　連載中
「鉄道乗り歩る記・撮り歩る記」著者

しかし担当者3人は、ことによりよって皆、大の電車好き。今の片瀬山がゴルフ場だった頃、クラブハウスの会議室に3人で籠って「どうしてこんな役をやらされるのか…」と、ぐちをこぼしながら検討会議をしました。その結果、わざわざ電車好きばかりを集めた上司の本音は「江ノ電の存続を願っているに違いない！」という結論に達したのです。それからは、いかにしたら引き延ばせるかと知恵を出し合い、引き伸ばし作戦の開始です。

そうこうしているうちに40年代に入り、マイカー人口が増え、バス業界の雲行きが怪しくなってくると廃線撤回、ビル建設、高架駅計画に切り替わったのです。その時、上司には先を読む力があったということでしょう。また、50年代には日本テレビ系ドラマ「俺たちの朝」や、NHK『新日本紀行』で江ノ電を扱った時に足が ガタガタ震えたのを40年経った今でも忘れられません。ブルーリボン賞にはもちろん鉄道友の会の一員として1票を投じました。

須藤武美（すどうたけよし）
写真愛好家・
江ノ電乗車歴70年の江ノ電ファン・
写真集『江ノ電のある風景』著者

それから乗客が増えたことにより、増車の需要が高まったため、玉電等からの譲り受けも検討したのですが叶わず、新車を作らざるを得なかったのです。そんな背景があってようやく生まれた新車の1000形です。この車輌が、55年に※ブルーリボン賞を受賞という快挙を遂げたのです。

※ブルーリボン賞
前年、国内で営業運転を開始した新造及び改造車両の中から鉄道友の会会員が選定した賞（昭和33年制定）

野口　子供の頃から江ノ電ファンだったので、生活の中にいつも江ノ電がありましたが、数十年ぶりに新車が出た時にはさすがにビックリしました。華やかな誕生の陰には思わぬ秘話があったのですね。それにしてもデザインも斬新な1000形が会報を通じてクラブの皆さんと活動しています。そのお祭りも年々盛大になり、当初100人位だった来場者が今では3000人位になり、タンコロ人気を益々感じています。江ノ電に関して取材されることも増え、NHKの「ブラタモリ」で江ノ電沿線の魅力を紹介したりしました。

昭和から平成へ、沿線の魅力を撮る

代田　最近の写真は、デジタルカメラやスマートフォンで誰でも簡単に撮れますが、昔のカメラはフィルムだったので、現像しなければ結果が分からず、失敗を繰り返しながら勘を掴んでいったように思います。

須藤　そうでしたね。今はカメラだけでなく撮影のマナーも変わり、困ることもあります。季節や時間を決め、イメージを描き、構図を決めてシャッターを切ろうとした瞬間、目の前に写真を撮ろうとする人が突然現れたりすることがあります。フィルムカメラの時代にはあまり見られなかったことでした。

野口　電車を撮るようになったのは、子供の頃、極楽寺の車庫に置いてあった玉電の車両を見て、思わず親のカメラを借りて撮ったのが最初です。その後、高校で写真部に入って以来、江ノ電ばかり撮るようになりました。昭和から江ノ電沿線の風景を見つめ、撮影してきたタンコロと言えば、当時の面白いエピソードがあります。今の集電装置はパンタグラフですが、昔は全ての車両がトロリーポールでした。トロリーポールは長い鉄棒の先端に直径10センチ位の滑車がついていてそれで架線から電気を採るのです。ですから曲線区間を通過する際には滑車が架線から外れて停電してしまうんです。車掌さんが窓から上半身を乗り出すようにして、外れた滑車を架線にはめている光景が普通に見られたんです。今では考えられませんね。このトロリーポールはタンコロ時代から昭和39年まで続きました。

江ノ電タンコロの思い出と集電装置

野口　昭和59年に江ノ電ファンクラブを立ち上げたのですが、当時は大学を卒業して教員になったばかりで、若かったのですが、会合に集まったのは子供ばかりでした。今は「タンコロまつり」や「タンコロ時代」と呼んでいるのを聞いてその呼び名を知り、「タンコロ物語」として江ノ電沿線新聞に掲載したことがあります。そのあと突然、さようならタンコロ」と書かれたヘッドマークをつけた車両が走っているのを見た時は思わず目を見張りました。

野口雅章（のぐちまさあき）
江ノ電ファンクラブ初代代表・
写真集『江ノ電のある風景』著者

須藤　タンコロは108号のみを言うのか、また当時の仲間を総称して言うのか、その範囲も定かではありませんが、湘南、鎌倉の観光資源と名勝・旧跡が豊富な沿線を1両でとことこと走る江ノ電らしい情緒が感じられるピタリのネーミングですね。

吉田　時代の波を乗り越えてきたからこそ今がある江ノ電ですね。ところで開通当初から1両で走っていた車両を通称「タンコロ」と呼び、今でも親しまれていますが、本当のネーミングの由来はわからないようですね。実は子供達が「タンコロ、タンコロ」と呼んでいるのを聞いてその呼び名を知り、「タンコロ物語」として江ノ電沿線新聞に掲載したことがあります。そのあと突然、さようならタンコロ」と書かれたヘッドマークをつけた車両が走っているのを見た時は思わず目を見張りました。

須藤　タンコロは108号のみを言うのか、また当時の仲間を総称して言うのか、その範囲も定かではありませんが、湘南、鎌倉の観光資源と名勝・旧跡が豊富な沿線を1両でとことこと走る江ノ電らしい情緒が感じられるピッタリのネーミングですね。

代田　最近の写真は、デジタルカメラやスマートフォンで誰でも簡単に撮れますが、昔のカメラはフィルムだったので、現像しなければ結果が分かり撮ったのが最初です。その後、高校で写真部に入って以来、江ノ電ばかり撮るようになりました。昭和から江ノ電沿線の風景を見つめ、撮影してきて今思うことは、沿線の風景は変わってきたけれど、「花は同じ季節に咲き、同じ場所に咲くこと」。そして江ノ電を愛し、いつまでも撮り続けて行こうという気持ちは変わらないことです。

吉田　今年で江ノ電開通116年目に入りましたが、明治の頃から変わらずにとことこと走り続けている江ノ電は沿線の情緒と風情をも乗せて、これからもますます愛され、親しまれる存在でありましょう。「今度はどの駅に降りてみようかな？」とワクワクするような風景満載の写真集『江ノ電のある風景』を皆様ぜひご覧いただきたいと思います。